

# 心の目が開かれるとき

新しい人生のために

小メッセージ集

水渡紀久雄

吉祥寺キリスト集会

町田キリスト集会

はじめに

2 p

1. 心の目が開かれるとき 8 p

2. 荒野の泉 22 p

3. 生ける水の川 40 p

4. 山に向かって

目を上げる 62 p

5. 霊と魂、日々の歩み 82 p

6. 主は

へりくだった人と住む 98 p

7. わたしは

まことのぶどうの木です 120 p

終わりに

136 p

## はじめに

私は1940年生まれで、今年85歳です。小さい頃からそのほとんどを東京で育ちましたが、家庭は貧困家庭と呼ばれても仕方がないような状態でした。そんな事情もあって早くから安定した仕事を持ちたい、そしてみなが安心して暮らせるような社会になればいい、自分もそのために役立ちたいという思いをもって育ちました。

しかし社会に出ると待っていたのは、およそ理想とは無関係に当座の目標達成を追い求めて競い合う企業社会。多少の達成感、多少の評価……それでなんとか自分を満足させようと走り回る典型的なサラリーマン人生でした。確かにそれは自己実現を目的とした人生でしたが、そんなもので本当の喜びがあるはずもなく、いつも自分は何のために生きているのか、これでいいのかという思いに追いかけてられました。当然これは心身の負担にもなり、自律神経失調症に類する体調不良にも悩まされるようになりました。

そのようなときに長年の友人から**聖書**と吉祥寺集会の信仰者の証し集『**光よあれ**』をもらいました。そしてた

くさんの信仰者が繰り返し、「がんばらなくていい」と言って信仰の喜びを証ししているにびっくりしました。こんな生き方もあるのか、と。

これがきっかけで私も少しずつ集会の礼拝にも集ってみましたが、しばらくしてやめてしまいました。このまま進んだら、今までの自分がこだわってきた価値観や生き方は何だったのかと急に不安になったからです。

ところが集うのをやめ、慣れ親しんだ昔の生活に戻って1ヶ月ほどした頃のことです。夜中にトイレに起きた時に転び、手をついたのが元でむち打ち症になり、それが元でまた体調不良に悩まされるようになりました。それで私は再び聖書を開き、集会に集い始めました。心の安らぎが欲しかったからです。

やがて何度目かの家庭集会でベック宣教師の聖書のお話を直接聴く機会がありました。そしてベック兄は生まれながらのすべての人間は罪の重荷を負って生きる者であり、自分ではどうしようもないこの重荷をイエス様は身代わりに負って十字架の犠牲となり、私たちを罪の奴隷状態から解放してくださったということを心を込めて

語って下さいました。もちろんそれはこれまでも繰り返し聴いたお話ですが、この時はそれを我がこととして素直に受け入れることができました。そしてその場でベック兄と共に祈ると、急に心が軽くなり、かつて経験したことがない喜びと平安……新しい世界に移されたような喜びと平安を体験することができました。

もちろんそんなふうに偶然のように始まった私の信仰ですから、喜びを感じる一方で、まだピンとこないもどかしさがありました。

……

私が住んでいる住宅団地の一角に高い鉄塔が建っています。関東平野を横断する高圧線の鉄塔です。

私は日々外出のたびに、否応なしにその鉄塔を見上げていたのですが、ある時からその空高くそびえる鉄塔を「十字架」になぞらえてイエス様のなし遂げてくださった救いの御業の偉大さを理解しようと試みていました。イエス様と共に私の体はその鉄塔に縛り付けられている姿を心に描いて、私の身に起こった主の御業の偉大さをもっと理解しようと努めたのです。

しかしそれは全くの徒労でした。何の新しい喜びも得られませんでした。

でもそれに替わって新しい喜びと確信を与えていただくときが来ました。

それは聖書を読み進めることによっていただいた主からの確かな導きです。

そのとき私の心に飛び込んできたのは、次の聖句です。  
ガラ 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

そして十字架上でイエス様とともに死んだ私のうちには、イエス様からの新しいいのち=御霊が与えられている。そして罪赦されて新しく生かされたものは、この新しいいのちの道を主の導きのままに歩むのだということ。これこそ罪赦され、救われた者の喜びだと知ったのです。

この経験は、信仰の歩みを正しく進めるためには、自

分の感じ方や考えに頼らず、必ず聖書のみことばを確かめて歩まなければならないことを教えていただきました。

こうしてよちよち歩きを始めた私ですが、ベック兄の絶えざる励ましもいただいて、喜びをもって信仰の道を歩み続けることができました。

そのうえ、はじめはなぜ信仰を持たなければならないのかと悩んでいた家内も、まもなく主の恵みをいただいて救いの恵みに与り、この20数年を共に主を仰ぎ見て歩む何物にも代えがたい喜びをいただいて日々を過ごす兄弟姉妹としていただきました。

もちろんこの間に次女の史奈子が突然召されるという私たち夫婦にとって思いも知れない試練が与えられました。

なぜ、どうしてという疑問が毎日、毎時襲ってきましたが、ベック兄や兄弟姉妹の共なる祈りに支えられて、これは私たちの信仰の成長のために、また史奈子の苦しみをあわれんで主がお許しになったことだと信じ、乗り越えることができました。

このように信仰者としても私の歩みは、真につたないもので、主のこの恵みをなかなかお伝えすることもできず、妻を別とすれば、自分だけの信仰に留まっており、聖書だけはできるだけ多くと思い、読み進めていましたが、主のご用を果たすこともなく過ごしていました。

しかしやがてベック兄からお声がかかり、いろいろな集会に出かけ、主をあかしし、福音をお伝えするようになるということで北海道や大阪、広島、山口、高知も含めて各地の集会にお邪魔してお話しさせていただくようになりました。

今回その時の原稿7部を中心に一つの冊子にまとめさせていただきました。まだイエス様の救いと平安を体験しておられない方、まだその歩みの中で迷っておられる方、真実主のために生きたいと望んでられる兄弟姉妹の方々にも、少しでもお役に立てれば幸いと存じます。

どうか神様と主イエス様からの豊かな恵みと導きがありますように。

2025. 10. 10

水渡紀久雄

心の目が開かれるとき

ヨハネ 9:1 -3

新178p

9:1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。

9:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」

9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

ヨハネ 9:35 -39

新180p

9:35 イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけて出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」

9:36 その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がおの方を信じることができますように。」

9:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」

9:38 彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。

9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

## 生まれつきの盲人のお話

聖書には、地上でイエス様と出会い、病を癒していただいたり、悪霊を追い出していただいた幸せな人の例が、いくつも語られています。今読んでいただいた「生まれつきの盲人」の記事もその一つで、次の二つの点で特別に注目すべき記事だと思えます。

### ①その注目点の第一は

いやしのみわざが行われる前にイエス様が弟子たちの質問に答えて、この人が盲目に生まれついたのは、この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためですと語られていることです。

当時イスラエルでは、病気は罪の結果だと一般に考えられていましたから、イエス様のこのお答えは革命的な

ものでした。

のちにイエス様はラザロの病気についても、「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」(ヨハネ 11 :4 - 新183 p)とおっしゃって、一度死んだラザロを墓の中からよみがえらせ、神様の栄光を明らかに示してくださいました。

このようにイエス様は、病気はむしろ神様の偉大さ、ご栄光を現すためのものであり、その背後には主ご自身がご計画をもって立っておられることを明らかにしてくださいましたのです。

病気だけではありません。どんな出来事(たとえ災いと思うことでも)の背後にも主がご計画をもって立っておられます。イエス様の言葉はそのことを示した重要なみことばです。

②第二の注目点は、①と関連しているのですが、盲人がいやされただけでなく、信仰による救いにまで導かれたという事実です。

確かに多くの方が**イエス様**にいやしていただいたものの、救いにまで導かれた人の記事は多くはありません。ところがこの記事では、本人が迫害されても信じる態度を取り続けているのをご覧になって、**イエス様**は再び現れ、彼をはっきりとした救いの喜びへと導いてくださいました。

このことによっても**イエス様**が地上に来られた目的が、個々の病人のいやしのためではなく、**罪**に苦しむ人間の救いという、**神様**の永遠にわたるご計画を実現するためだったということがわかります。

だからこそ、このあと**イエス様**は十字架につき、人間の身代わりとなって**神様**からの罰を受け、身を裂き、血を流し、命を捧げて、罪の贖いを成し遂げてくださいました。おかげで**イエス様**を救い主と信じるならば、人は誰でも罪赦され、**神様**との平和、永遠のいのちにあずかるという、救いへの道が開かれました。

たとえいやされても、その結果相変わらず永遠の滅びに向かって罪と死の闇の中を歩むのだとすれば、その人にとっていやしがはたして益になるものかどうか。また

イエス様が来られたのが、いやしや一時的な問題解決のためだったとすれば、イエス様はどうして十字架の苦しみをお受けになる必要があったでしょう。

### 心の目を開かれた者

イエス様の十字架の贖いのおかげでいまや人は、いつでもどこでも信じるという決心ひとつで滅びの道から救いの道へと移していただけます。

当時と違ってイエス様は天におられるのでじかに出会うことはできませんが、イエス様を自分のために十字架で犠牲になってくださった救い主と信じ、受け入れるなら、それこそがイエス様との個人的な出会いです。

このとき私たちは救われた者となり、人にはわからなくても、その保証としてイエス様からの新しいいのちとして御<sup>みたま</sup>霊を私たちのうちにいただきます。この御<sup>みたま</sup>霊により、それまで死んでいた霊の目、心の目が開かれ、目開かれた者となってイエス様を見上げ、イエス様との親しい交わりのうちを歩むのです。

イエス様のところには罪の赦しがあり、たましいの安

らぎがあり、喜びがあり、希望があり、愛があり、慰めがあり、励ましがあり、永遠のいのちがあります。開かれた心の目でイエス様を見上げることによってのみ、私たちはこのすべての良きものによる満たしを体験することができます。なかには霊的元気をいただいて病が快方に向かうという場合も起こりえるでしょう。

### 開かれた目で何を見るか

ところが私たちは、救われたと言いながら、せっかく開いていただいた目で、実際は何を見たらいいのかよくわかっていないというような者ではないでしょうか。

イエス様が開いてくださった心の目で私たちが見なければならぬのは、イエス様ご自身です。それがイエス様からいただいた<sup>みたま</sup>御霊の働きです。

ヨハネ 16 : 14 新195p

16:14<sup>みたま</sup>御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

では開かれた目でイエス様ご自身を見るとは、具体的

にはどうすることでしょうか。

①まずみことばを頼りに絶えず祈り、日々イエス様のみ  
ところを尋ねてそれに従うことです。

パウロは書いています。

**Ⅱコリント 4 :18 新 319 p**

**4:18 私たちは、見えるものではなく、見えないものに  
こそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えな  
いものはいつまでも続くからです。**

目に見えないものとは、言うまでもなくみことばとして  
与えられている主のお約束であり、私たちのうちに住  
んでおられる<sup>みたま</sup>御霊の導きです。つまりところはやはりイ  
エス様ご自身です。

この世の流れや目の前の問題やあるいは自分の思いか  
ら目を離して、日々みことばと祈りによって主との親し  
い交わりにとどまることが大切です。人の動きに心を奪  
われてもいけません。

とくに十字架の上で苦しんでくださったイエス様を私  
たちが心の目で見上げるならば、どんなときでもあらた

めて感謝と悔い改めの心に満たされて、勇気と平安をいただきます。

これはいつまでたっても私たちの信仰生活の立脚点です。

**ヘブル 12 : 2 新404p**

**12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。**

②二番目に開かれた目でイエス様を見るとは、起こってくるあらゆることを通して、その背後に立っておられるイエス様を見、その導きに信頼することです。

イエス様は、私たちがイエス様を見続けるように、そしてイエス様をよりよく知るようにと導かれます。そのために愛する者を試みにもあわせなさいます。

先ほどの盲人の場合もそうでした。彼は目を治していただきましたが、それを証したために迫害にあいました。

しかしイエス様は、ご自分にある者を見捨てるようなことはありません。むしろこのような機会を通してご自

身をよりはっきりと現すとともに、さらに永遠につながる「よいもの」を与えて祝福し、信じる者を悩みながらも大いに喜ぶ者に変えてくださいます。

とくによみがえられた後の**イエス様**は、この地上で不思議なわざやしるしを現すことよりも、病や困難を通してでも**イエス様**が本来願っておられること、すなわち周りの人々をも含めた一人一人の魂の救いと、また救われた者の成長を最優先に働かれます。

先ほども見たように、与えられた病気の背後にも主が一人一人に対するご計画をもって立っておられるのです。

だから私たちはどうしてもいやしてくださいとそこばかりこだわるのではなく、背後に立っておられる**イエス様**を見上げ、最善をなしてくださるお方におゆだねして祈ることが大切だということではないでしょうか。

(ベック兄は「聖書と病気」というメッセージ・シリーズの中で「信じる者としてのいのちを主なる神に捧げ、霊も魂も肉体もすべて主におゆだねし、<sup>みたま</sup>御霊の導きのまま

に歩むことが大切です。結局自分の思っていること、願っていることはそんなに大切ではない。主よ、あなたは完全であり、あなたの導きは完全であり、おゆだねします、最善だけがなりますように、という心構えが大切です」と語っておられます。)

人がどんな状態にあってもこのように祈り続けて歩むことにより、主はその人のうちで勝利してくださり、平安と喜びと希望で満たし、よりはっきりとご自身を現してください。言ってみればなにか「奇蹟」を体験するというよりも、その人自身が「奇蹟」になるということにほかなりません。こうして私たちは主の忠実な証し人となり、主の御姿に似た者へと変えられていくのです。

詩 71 :7 -8 旧893 p

71:7 私は多くの人にとっては奇蹟と思われました。あなたが、私の力強い避け所だからです。

71:8 私の口には一日中、あなたの賛美と、あなたの光栄が満ちています。

③三番目に開かれた目でイエス様を見るとは、天を仰ぎ見、信ずる者のいのちもすでにイエス様のもとに住む場所を備えられているという約束に目をとめ、感謝することです。

そうすれば、私たちが永遠のいのちをもってイエス様のもとへ導かれていることが確信でき、また再び来てくださる主の約束を期待をもって待ち望む心がわき起こるでしょう。

そしてイエス様が再び来られるとき、私たちはよみがえりのからだも与えられ、大いなる喜びのなか主とともに永遠の世界に生きることになるのです。

**ピリピ 3 :20 -21 新354p**

**3:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。**

**3:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる**  
みちから  
**御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**

繰り返しますと、開かれた目で**イエス様**を見上げるとは、①まず日々みことばを頼りに絶えず祈り、**イエス様**から目を離さず、みこころに従うことであり、②また起こってくるあらゆることを通して、その背後に立っておられる**イエス様**を見、その導きに信頼することであり、③さらに私たちの国籍がある天を仰ぎ見、私たちのために再び来てくださるという**イエス様**を待ち望むことです。

このように私たちが開かれた目で主を仰ぎ見るならば、主との深い交わりを通して**イエス様**をよりよく知り、満たされて、さらに主の再臨と永遠からのご計画の完成を待ち望む者となるよう導かれます。

今の世には苦難と危険が満ちています。だから自分や家族、人の力だけに頼ろうとするなら平安もないし、希望も生まれてきません。また自分自身のうちにある自己中心の思いが重荷となって、自分や周りの人を苦しめます。

しかし私たちの前にすでに用意されている**イエス・キ**

リストとの出会いを受け入れ、自分の苦難や重荷をゆだねようと決心するなら、新しい人生が開かれます。心の目が開かれて、今まで見えなかったものが見えてくるのです。

イエス・キリストは宗教とは関係ありません。だから宗教団体の会員になる必要はありません。出会いのための条件はそのままの状態でもイエス様を信じることだけです。そして出会った後も信頼して解決をゆだねるだけで、悩みがあってもそれにこだわらず喜んで前向きに生きることができます。

この気持ちで祈り、集うとき、主は私たちにみこころに適った兄弟姉妹を与えてくださり、共に祈り合って歩み、  
励まし合って主の道を歩むよう導いてくださいます。

私たちはこのような主の計らいによって、互いに助け合い、主を誉め讃え、主を証する<sup>あかし</sup>みからだなる教会としてのこの集會に喜びをもって集わしていただいているのです。（聖書エペソ人への手紙1章23節参照）

どうかこの大いなる出会いと解放、そして限りない喜

びが、お一人お一人の体験となりますように。

(了)

2009. 5. 11 春日部 9. 8. 2 吉祥寺 10. 3. 28 掛川  
10. 6. 13 富山 10. 6. 19 相模原 10. 8. 19 広島 10. 11. 13  
旭川

**2025. 1. 19 町田**

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるもので  
す。

# 荒野の泉

詩篇 36 :5 -9 旧861p

36:5 主よ。あなたの恵みは天にあり、あなたの眞実は雲にまで及びます。

36:6 あなたの義は高くそびえる山のようで、あなたのさばきは深い海のようにです。あなたは人やけもの獣を栄えさせてくださいます。主よ。

36:7 神よ。あなたの恵みは、なんとたつと尊いことでしょう。人の子らはみつばさ御翼の陰に身を避けます。

36:8 彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしよう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいます。

36:9 いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。

## 主の偉大さ

いま読んでいただいた詩篇 36 篇でダビデは、「あなたの恵みは天にあり、あなたの真実は雲にまで及びます。あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のように」と、主の偉大さをたたえています。そしてその主は、罪に捕らえられている者、神に恐れを持たない者（詩篇 36 : 1）、つまり罪人となった人間をもあわれんでおられ、その御翼の陰に身を避ける者には、楽しみの流れを飲ませてくださると証しされています。

もちろんいのちの泉も、光も、罪の闇の中でもだえ苦しんでいたたましいが長い間探し求めて来たものです。ダビデは自分で戦うことをやめ、へりくだって御翼の陰に身を避けたとき、主のうちにいのちの泉、そして真理と希望の光も見いだして大いに喜んでいるのです。

## いのちの水がわき出る泉

イエス様によって救われた私たちも、同じような体験をしているのではないのでしょうか。

私たちは、長い間生けるまことの神を知らず、神を恐れることもなく、罪の中をさまよい歩いていた者でした。

イエス様は、そんな私たちのために犠牲になり、私たちを罪と死の暗闇から救い出してくださいました。おかげで私たちは罪赦されただけでなく、イエス様ご自身がいのちの泉となって私たちを満たし、真理と希望の光となって私たちを導いてくださいます。

イエス様ご自身のみことばです。

ヨハネ 4 :14 新 169p

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

つまりイエス様を心から受け入れる者は、罪の赦しだけでなく、イエス様がいのちの泉であり、私たちのたましいの飢え渴きを癒やしてくださる方であることを体験できるのです。そのためにイエス様

は、救われた者に助け手である<sup>たすけて</sup>御<sup>みたま</sup>霊を与えて、日々の生活を導き、さらに永遠のいのちの希望を与え、喜びで私たちを満たしてくださるのです。

さらに

**ヨハネ 1:4-5 新 157p**

**1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。**

**1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。**

とあるように、イエス様は、この世の闇や心の内に巣くう闇を打ち払う真理と希望の光となって信じる者を導いてくださるのです。

イエス様に出会う前の私たちは、自分が新しい人生を歩めるなどと思ってもいなかったのではないのでしょうか。しかしそれまでの生き方に行き詰まって助けを求めたとき、イエス様は私たちを闇から、泥沼から引き上げて新しい道に立たせてくださいました。それは罪や自分から解放された、また死の恐怖からも解放された、いのちの道、光の道です。これは理屈ではありません。人が正直になって神様

の前にへりくだるときに与えられる恵みです。どうかお一人でも多くの方が、この奇蹟のような体験をご自分のものにされますように。

いずれにしても信じる者は、この方を自分のうち深くに受け入れてともに歩んでいただかなければなりません。

### しゅ 主を阻む働きと御霊<sup>みたま</sup>の働き

しかし私たちのうちには、主イエス様を自分のうち深く受け入れるのを阻む力、生まれながらの肉の働きの残っています。

それは①永遠のいのちの歩みではなく、地上の喜びや満足を求めようとする心です。②またみことばに聞き従って自分を明け渡すのではなく、自分中心の行動、自分を誇り、自分勝手を続けたいという心です。③困難と忍耐を嫌い、砕かれることを嫌い、安楽に過ごしたいという心です。

とくに信じ始めて間もないころの私たちは、自分をしゅ 主にゆだねることがわかりませんから、どうして

も恵みだけを求めがちです。そのために思うとおりの結果が得られないと主<sup>しゅ</sup>への信頼を失い、あきらめて、昔ながらの世界、自分本位の思い・行動、そしてまた偶像崇拜の世界に戻ってしまうようなことが起こります。

もちろんこの肉の働きは、信じた後も根強く残って信仰者を苦しめます。しかし主<sup>しゅ</sup>は、そのような肉なる者の弱さを超えて私たちを御許<sup>みもと</sup>へと引き寄せてくださるのです。

自分の罪深さに気づいて心から主<sup>しゅ</sup>に助けを求めらるなら、主<sup>しゅ</sup>はみことばを与え、また祈りと交わりを通して真の信仰者へと成長させてくださいます。いのちの泉から、御霊<sup>みたま</sup>の水をふんだんに飲ませ、力づけ、信仰を新しい高みに導いてくださいます。

## あらの 荒野の泉

また主<sup>しゅ</sup>は、信じる者にゆだねることを体験させ、いのちの泉から水を飲ませ、その成長を確かなものにするために試練の荒野<sup>あらの</sup>にも導き入れられます。

そして荒野<sup>あらの</sup>に導かれた私たちは、なによりまず私

たちのうちにある真の姿を知るように導かれるのです。

人のうちにある真の姿を明らかにするために、わざわざご自分の民を<sup>あらの</sup>荒野に導かれたお話しが旧約聖書に記されています。

有名な<sup>しゅつ</sup>出エジプト、すなわち<sup>しゅ</sup>主が海水を左右に切り裂き、

その中央に道を開いてくださったので、モーセに率いられたイスラエルの民は全員無事にエジプトを脱出できました。

しかし<sup>しゅ</sup>主は、イスラエルの民をそのまますぐに目的地カナンに導くのではなく、わざわざ民の信仰を確かめるために、敢えて回り道をさせてシュルの<sup>あらの</sup>荒野に導かれました。そのときの民の混乱ぶりが以下のように記されています。

出エジプト 15 :22-24 旧 112p

15:22 モーセはイスラエルを<sup>あし</sup>葦の海から旅立たせた。彼らはシュルの<sup>あらの</sup>荒野へ出て行き、三日間、<sup>あらの</sup>荒野を歩いた。彼らには水が見つからなかった。

15:23 彼らはマラに来たが、マラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、そこはマラ\*1と呼ばれた。

15:24 民はモーセにつぶやいて、「私たちは何を飲んだらよいのですか。」と言った。

\*1 苦いという意味

もともとイスラエルの民はモーセとともに「主しゅに向かって私は歌おう。主しゅは輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに」

(出エジプト 15 :1) と賛美したばかりでした。それなのに飲み水がないと言って不平たらたら、簡単に不信仰に陥ってしまったのです。

それでも主しゅはこのあとモーセの必死の祈りに答えて、マラの苦い水を甘い水に変えてくださいました。そして戒めとみことばを与えた上で、彼らをエリムへと導かれます。そこには12の水の泉と70本のなつめやしがあったと記されています。

そのときイスラエルの民は、主しゅは何でもできるお方だ、あわれんでくださるお方だ、そしてどんな渇きをも癒やす、まことのいのちの水を飲ませてくだ

さるお方だと知るべきだったのです。

しかし彼らは、主に恵みを求めるだけで、主の前にへりくだることのできない、そして主に信頼することのできない、頑なな民でした。

この後、主は、水を求める民のために岩から水を出して飲ませてもらいました。（出エジプト 17 章、民 20 章）それでも彼らは不信仰を悔い改めようとしませんでした。

このことについてのちにパウロは、次のように記しています。

I コリント 10:4-5 新 302 p

10:4 おなじ みたま みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。

10:5 にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、あらの 荒野で滅ぼされました。

当時のイスラエルの民は気づいていなかったのかも知れませんが、イエス様は主なる神様が人間のために与えてくださったあらの 荒野におけるいのちの泉

であり、<sup>みたま</sup>御霊の岩だったということでしょう。そして<sup>しゅ</sup>主は忍耐の限りを尽くして不信仰な民を救い、新しいのちに生きるものに変えようと働かれました。しかし彼らはその<sup>しゅ</sup>主を信頼しようとせず、悔い改めようとしなかったため、40年間<sup>あらの</sup>荒野をさまよって歩いただけで、結局約束の地カナンに導き入れていただけなかったのです。これが当時のイスラエルの民の悲劇でした。

### <sup>しゅ</sup>主ご自身を慕い求める信仰

このように<sup>しゅ</sup>主は、①私たちの真の姿、不信仰で罪深い姿を明らかにし、悔い改めに至らせるために<sup>あらの</sup>荒野に導かれます。

また<sup>しゅ</sup>主は、②試練を通して<sup>しゅ</sup>主ご自身が私たちにあってどれほど大切な方かを体験させるために、<sup>あらの</sup>荒野に導かれます。

その<sup>あらの</sup>荒野の道は、最初の救われた喜びを忘れさせてしまうほど、荒れ果てた道かも知れません。なぜと思わされるほど飢えに苦しみ、渇きにもだえる道かも知れません。

しかしその苦しみの中でも、心の底から主<sup>しゅ</sup>を呼び求めるならば、主<sup>しゅ</sup>は必ず祈りに応えてご自身を現してくださいませ。そして私たちは、個々の問題の解決よりも主<sup>しゅ</sup>ご自身がともにいてくださることが、私たちにとってどれほど大きな救いであるかを体験するのです。言いかえれば私たちの渇き切ったたましいは、いのちの泉である主<sup>しゅ</sup>からの霊的な平安、慰めに満たされ、希望の光をいただいて生き返るのです。

主<sup>しゅ</sup>は、まさに私たちにとって荒野<sup>あらの</sup>に湧き出る泉です。

こうして私たちの信仰は、個々の恵みを求める信仰から、主<sup>しゅ</sup>ご自身を慕い求める信仰へと成長します。

### (キャッチボールの話)

ある兄弟が喜んで話してくださったことです。

この兄弟は、自分は救われているのかどうか確信がなかった、そのうえ仕事もうまくいかない。そんなときに体験したことだそうです。

今まで自分は、<sup>しゅ</sup>主に祈る時、キャッチ・ボールにたとえば、返ってくるボールばかり気にしていてボールを投げ返してくださる方のことを見ていなかった。その方のことを考えれば、返ってくるボールがどうであろうと心配することはないのだと気づかされた。そうしたら、いままで抱え込んでいた問題が大したものではないと思えるようになったということでした。

何でもできる方、いのちの泉であり、光である方がともにおられるなら、思い悩む必要はないと体験されたのです。

うらやましいような、貴重な体験だと思います。

### 主にあって喜ぼう

いずれにしても私たちにとって大切なことは、私たちの周りに起こることや環境ではなくて、<sup>しゅ</sup>主ご自身が私たちのなかに生きてくださるかかどうかです。

旧約聖書のハバクク書には次のように書かれています。

**ハバクク 3 :17-19 旧 1411p**

3:17 そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。

3:18 しかし、私は主しゅにあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。

3:19 私の主しゅ、神は、私の力。私の足を雌鹿めじかのようにし、私に高い所を歩ませる。

このように試練の中でも主しゅに信頼する人、砕かれ、自分を明け渡して従う人には主しゅがその人のうちでいのちの泉となり、光となり、またすべてとなって満たしてくださいませ。

なんと素晴らしいことでしょうか。

——それにくらべ自分の思い、自分の理解、自分の「愛」（括弧付きの愛ですが）などを頼りに行動し、それが真の信仰などと思い込むならば、主しゅのみこころからはずれてしまう恐れがあるのではないのでしょうか。——

もちろん主しゅが、私たちの期待した時にすぐに現れ

てくださるとは限りません。主<sup>しゅ</sup>は最善の時を待っておられます。だからいつもみことばを頼りに主<sup>しゅ</sup>に祈り、自分をゆだねて歩むことが大切です。

詩篇の第 1 篇に出てくる人も、このような歩みによって実を結ぶ信仰者なのではないでしょうか。

**詩 1:1-3 旧 832p**

1:1 幸いなことよ。悪者のはかりごと<sup>つみびと</sup>に歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。

1:2 まことに、その人は主<sup>しゅ</sup>のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

1:3 その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしてても栄える。

果たして私たちは、ここにあるように罪の自分から離れ、主<sup>しゅ</sup>のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ者でしょうか。

また荒野<sup>あらの</sup>のようなこの世にあっても、この主<sup>しゅ</sup>を心から受け入れて、自分をあけわたし、絶えずいのち

の水を飲み続ける者でしょうか。

そうであれば私たちでも、水路のそばに植わった木のようにいつも緑の葉を茂らせ、イエス様にあるいのちの実を結ぶ者となれるのです。

このことを心にしっかりととどめて、歩み続けたいものだと思います。

### 試練の意味

最後に試練の意味について、スボルジョン兄弟が書いた言葉がありますので紹介します。

信仰は、試練を受けなくても本物であるかもしれない。しかしそれは弱い信仰である。信仰は試練を受けない限り、発育不全に終わるかも知れない。信仰はすべてが非（別訳、否）である時に、最も旺盛になる。……  
氷河の縁に咲く花ほど、愛らしい色を帯びたものはなく、極地の空に輝く星ほど明るい光を放つものはなく、また砂漠にわき出る水ほど甘美なものはない。おなじように逆境の中であって生き、勝利を得た信仰ほど尊いものはない。

試練によって信仰は経験をもたらす。川を横切ること

を余儀なくされるまでは、あなたは自分の弱さを認めることができなかつたであろう。そしてあなたは大水の中で支えられなければ、決して**神**の力を知ることもなかつたに違いない。信仰は試練によって鍛錬されればされるほど、その強さ、確かさ、熱烈さを加える。……

しかし、このために信仰の若い者が落胆する必要はない。あなたが試練を求めなくても、試練は必ず来る。適当な時期に十分に与えられる。それまではあなたは深い経験を要求することはできない。しかし、今あなたが受けているだけの恵みを**神**に感謝せよ。あなたが到達しただけの聖い<sup>きよい</sup>確信のために**神**に感謝せよ。この方法によって歩め。そうすれば、あなたはいよいよ**神**の祝福を受け、ついにあなたの信仰が山を動かし、不可能を克服するに至るであろう。

C. H. スポルジョン「朝ごとに」(いのちのことば社) 3  
19 p から

(了)

2012. 10. 14 町田

2012. 12. 27 御代田

2023. 7. 30 吉祥寺

2025. 1. 19 町田

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるものです。

# 生ける水の川

ヨハネ 7 :37 -39 新 174 p

7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

## 1. たましいの飢え渴き

私たちは、人間のたましいも飢え渴くものであり、その飢えと渴きは、肉体の飢え渴き以上に人間を苦しめるということを知っているでしょうか。

過去の自分を振り返っても、自分のたましいの飢え渴きに気づいていたかどうか。あれがしたい、これがしたい、あれが欲しい、これが欲しいと自分の心を満足させてくれるものを漁り歩いていたことは確かですが、本当は何を求めているのかわかっていなかったのだと思います。

そんな私たちに**イエス様**は出会ってくださいました。そして人間はみな飢え渴くたましいを持つ者であり、それを満たそうとむなしく駆け回り、自分を苦しめ、また人を苦しめる者であること、それは**神様**から離れてたましいの平安を失った状態、罪の状態から起きていることであり、したがって飢え渴くたましいの救いは**神様**のもとにしかないことを教えてくださったのです。

## 2. 主が与えるいやしと満たし

聖書によると、人間を罪から救い出すために人となって地上に来てくださったイエス様は、その宣教の初めに宣言してくださいました。

マタイ 5 :6 - 新5 p

5:6 義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。

義に飢え渴いている者とは自分の罪の状態に心を痛め、そこから救われたいと心の底から願っている者のことでしょう。そしてそのものは満ち足りるから幸いだとおっしゃっています。同時にイエス様は、このようなたましいの救いは人間の努力によっては決して得られないことを明らかにされました。

### ○ニコデモの新生

それについては律法学者ニコデモについての記事が有名です。

ニコデモは多くの聖書知識と道徳的な生活によって神

の国への確信を得たいと努力していた人でした。しかし彼には確信がなく、たましいに安らぎもありませんでした。それである夜ひそかにイエス様を訪ねて、その導きを求めたのです。そのときのイエス様のお言葉です。

ヨハネ 3 :3 -6 新161p

3:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

3:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができますでしょうか。」

3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」

3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

ニコデモが救いと永遠のいのちの確信に飢え渴いていることを、イエス様はすぐ見抜かれました。そしてニコ

デモが必要としているものは、靈的に新しくされる、つまり**新生**によってのみ得られることを示してくださいました。知識でもなく、努力でもなく、律法の行いでもなく、ただ**イエス様**のもとに来て、そのたましいの飢え渴きをいやしてくださるよう素直に願い求める者だけが、罪赦されて**御霊**が与えられ、新しく生きるものとなり、**神**の国にあずかる者となると教えてくださったのです。

### 3. イエス・キリストの十字架と**聖霊**の時代

このことを**イエス様**は別のみことばでも示してくださいました。それが冒頭のみことばです。

ヨハネ 7 :37 -39 新 1 7 4 p

7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

これは、イエス様が仮庵の祭りの際にエルサレムの宮で教えられたときのみことばです。

これより先イエス様は、その日水を飲ませてくれたサマリヤの女に「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(ヨハネ 4:14 - 163p) と似たようなみことばを与えておられますが、この日エルサレムではだれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさいとすべての人によびかけられたのです

そしてわたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになると約束していただきました。

ここで生ける水の川とは、イエス様が後に十字架で死

んでよみがえってくださった後、信じる者すべてに与えられる**聖霊、御霊**のことを意味していると記されています。

つまり**イエス様**の十字架の贖いを通して**主なる神様**は、私たちが霊的な死から救い出して義と認めるだけでなく、私たちに**イエス様**のいのちを現す**御霊**を与えて、みこころに適った歩みができるようにと計らってくださったのです。

律法の時代が終わり、**イエス様**の十字架の贖いと**御霊**によって**神様**との結びつきが回復される時代が到来したことがわかります。

このことをパウロは次のように書いています。

ロマ 8 :1 -4 新275p

8:1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

8:2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

8:3 肉によって無力になったため、律法にはできなくな

っていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。

8:4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

この新しい時代の到来を告げる出来事が、聖書に記されています。五旬節の出来事です。これを境に弟子たちが変えられ、多くの人が主を受け入れ、御霊に導かれて初代教会が誕生したと記されています。(使徒の働き 2 章)

#### ○バプテスマのヨハネ

しかし聖書は、これより前、イエス様がまだ伝道を始めの前に新しい時代の到来を予告した人物がいたことを記しています。

それはバプテスマのヨハネです。ヨハネは「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ3:2 新 3p) と言ってヨルダン川で水のバプテスマを授けていましたが、イエス様を見ると、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」

(ヨハネ 1:29 新158p)と叫び、自分は水によってバプテスマを授けているが、イエス様は「**聖霊**によってバプテスマを授ける方である」(ヨハネ 1:33 新 158p)と証言したのです。

まさに**イエス様**によって信じる者が**聖霊**のバプテスマに授かり、義とされ、新しいいのちにあずかることをヨハネは知らされていたということでしょう。

その上で彼は「私はその方のくつのひもを解く値うちもありません」(ヨハネ 1:27)」と証しし、さらに「**あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。**」(ヨハネ 3:30 新 162p)と喜びをもって語ったと記されています。

#### 4. **御霊**の働き

ここで**御霊**が与えてくださる満たしとはどんなものか、簡単に見ておきましょう。

①**信じる者に罪赦された平安、新生の喜び、永遠のいのちの希望を与えてくださる。**つまり**聖霊**のバプテスマです。

このことについてはすでにニコデモの新生についての

項で触れましたが、次のみことばによっても証しされています。

テトス 3 :3 -7 新386p

3:3 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。

3:4 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、

3:5 神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。

3:6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

3:7 それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。

イエス・キリストによる**聖霊**のバプテスマを解き明かしたみことばです。

聖書が言う新生は、義と認められて永遠のいのちの道を歩むこと、**神**の相続人となることであって、単に心の持ち方によって人が変わるという程度のものではありません。**イエス様**の十字架の贖いの故に値なしに義と認められたことを確信し、感謝し、**御霊**によって平安と喜び、希望のうちに歩む奇蹟のような体験です。

使徒の働きに出てくる生まれ変わったペトロをはじめとする弟子たちの姿がそれを現しています。

②救われた者を整え、主とともに永遠のいのちを生きる者にふさわしく成長させてくださる。

救われても私たちは相変わらずの者ですが、**御霊**が働いてくださるなら、みこころに適った実を結ばせてくださいます。

ガラテヤ 5 :22 -24 新339p

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はあ

りません。

5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。

また御霊が真理を教え、みことばを生かし、聞き届けられる祈りへと導いてくださいます。

ヨハネ 16 : 13 -14 新 1 9 5 p

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

16:14 御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

ロマ 8 :26 -27 新 2 7 6 p

8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめき

によって、私たちのためにとりなしてください。

8:27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

こうして私たちは、この世の知恵や自分の悟りに頼るのではなく、みことばと祈りを通して真理に導かれ、主との深い交わりにあずかり、イエス様をよりよく知るものとなるのです。

そしてまた困難の中で御霊が私たちの内なる人を強め、また私たちのうちを主の豊かさで満たし、主のみ姿に似たものに変えてくださるのです。

エペソ 3 :16 -19 新344p

3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてください  
ますように。

3:17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますよう

に。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、

3:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、

3:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

③さらに御霊は、救われた者を主のみからなる教会の各器官として結びあわせ、互いに心をつにして主に祈り、主に従い、主を証し、主を伝えて世に出て行く者としてくださいます。

使徒の働き 1 :8 - 新 2 0 8 p

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

エペソ 4 :1 -6 新 3 4 4 p

4:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

4:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。

4:6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

#### 5. 御霊に満たされるために

もちろん救われたすべての者に御霊が与えられています。しかし御霊が与えているということと、御霊が生き生きと働き、その人のうちを満たすということは違います。

イエス様は「心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」と約束してくださったのですが、この約束が私たちのうちに実現するために私たちは何を心掛けなければならないのでしょうか。

それは一口に言えば、先ほどのヨハネの言葉「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません」という言

葉に集約されているのではないのでしょうか。

具体的に言えば、

①まずはみことばと祈りによって、また兄弟姉妹との交わりの中であって、高ぶりを捨て心から主の前にへりくだることです。さまざまな肉の思い、プライドや自分を義とする心、また心配や思い煩いを捨て御霊の導きに従う心を確りと持つことです。いわば<sup>から</sup>空の器になることではないのでしょうか。

②イエス様を全人格的に仰ぎ見て、そのすべてを愛し、信頼し、受け入れることです。イエス様を自らの主として信頼し、全主導権をゆだね、イエス様に生きていただくことです。

そのために自分の都合のよいことにこだわるのではなく、みこころがなることを祈り求めるべきでしょう。私たちはしばしば愛するイエス様と祈りますが、愛するならそのすべてを受け入れなければなりません。

③あくまでイエス様につながって、そのいのちである御霊の満たしを求めなければなりません。イエス様から離

れて気分的な、感情的な満たしを追い求める人は、悪い霊にとりつかれる危険があります。

また日々イエス様に立ち戻ることをおろそかにするならば、イエス様がラオデキヤの教会に警告されたように、いつしか自分の信仰生活に自己満足しているだけの信者になりかねません。

黙示録 3 :17 - 新441p

3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

私たちも、イエス様のためと言いながらいつの間にか自己満足と功名心から行動しようとしている自分に気づかされることがあるのではないのでしょうか。自分の最良の判断、善意から出たことであっても、祈って本当のみこころに適った導きを求めないと危ない。いつの間にかみこころから外れた歩みに陥って、御霊のご支配の中にある主の教会を傷つけ、主のご計画を妨げる者にさえなりかねません。

だからヨハネの言葉「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません」という心の態度こそ大切です。

こうして主の栄光だけを求めて歩むとき、主からいただく生ける水の川が私たちのうちから溢れ出て、周りの方々をも潤す者となる。兄弟姉妹とともに主の栄光を証しし、主をのべ伝える者として実を結ばせていただけるのではないのでしょうか。

この方にすべてをおゆだねして歩めれば、幸いだと思えます。

I コリント 6 :19 -20 新 2 9 7 p

6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

(了)

10. 8. 22 春日部

10. 8. 28 山口

10. 11. 2 吉祥寺学び

## 参考

### 五旬節の出来事

使徒の働き 2:1 -4 新209p

2:1 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。

2:2 すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。

2:3 また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。

2:4 すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。

これを目撃した人々に、ペテロを始め使徒たちが立ち上がって、ユダヤ人たちが十字架につけたイエスは救い主であることを告げ、そのよみがえりを力強く明かします。

使徒の働き 2:23 -24 新210p

2:23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。

使徒の働き 2:32 -33 211p

2:32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。

2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。

そして悔い改めて罪赦され、この**聖霊**を受けるようにと語るのです。

その結果 2-41 その日 3000 人がバプテスマを受け、弟子に加えられたうえ、2:46 そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、2:47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。(新212p)とあるように、**御霊**に導かれて初代教会が誕生したことがわかります。

## 参考2

### バプテスマのヨハネの指

（「2010年ドイツ喜びの集い」の際、国境を越えてフランス領のコルマールにあるウンターリンデン美術館を見学しましたが、その時畳何倍分もある大判の絵画「十字架のキリストを指さすバプテスマのヨハネ」を前にした驚きと感動は忘れられません。）

大きな指で、十字架につかれたイエス様を指さすヨハネ。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」とヨハネの声が館内いっぱいに響いてくるようでした。

**あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。**

これはイエス様に対するヨハネの態度を示す言葉ですが、信じる者が、絶えず心がけるべき心の態度を示しているように思いました。

# 山に向かって 目を上げる

—私の助けは天地を造られた

主から来る—

詩篇 121:1-8 旧951p

121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。

121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。

121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。 . . . .

121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとしえまでも守られる。

今日は、この詩篇のみことばから示されること、つまり「祈り」について何点かに分けてご一緒に考えてみたいと思います。

まず

## 1 番目. 私たちには見上げる天がある

私たちが日々目にし、悩まされているこの世の混乱と虚しさ。でも同じように苦しみながらこの地上を歩む者であっても、この詩編の作者のように**私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る**と天を仰ぎ見て祈れる人は、最も幸いな人ではないでしょうか。

そしてまさに私たちは、その恵みにあずかっているのです。**私たちには、どんなに行き詰まっても、見上げることができる天があります。**

そこには天地万物を創造し、すべてをその御手<sup>みて</sup>のうちに収めておられる、**まことの神様と私たちの主イエス様**がおられます。そして創造の昔から神様が**私たちのため**にご計画された御国があり、**永遠の都**があります。私たちは救われた者として、そこで**イエス様**とともに**神の家**

族として生きるのです。

もちろんこれを可能にしてくださったお方は、**神ご自身と御子イエス様**です。

**イエス様**の十字架の犠牲とよみがえりによって、私たちは罪過の中から救い出していただきました。

**エペソ 2:4-8 新 342 p**

2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、

2:5 罪過ざいかの中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——

2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みみを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神

からの賜物です。

私たちは罪赦されただけでなく、**イエス様**とともによみがえらせられ、<sup>みたま</sup>**御霊**を通して新しく生きる者とされ、永遠のいのちをいただいて**イエス様**とともに御国を継ぐ者とされている。それは、私たちが立派だからでなく、ただ信じることによって与えられた**神様からの贈り物**である、と記されています。

**2 番目。主は祈りを聞いていて、守り導いてくださる。**

しかも**イエス様**は、私たちの地上の歩みをも守り通し、とこしえまでも導いてくださいます。冒頭読んでいただいた詩篇 121 篇にあった通りです。

**詩篇 121:3-8** 旧 9 5 1 p

121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。……

121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

このように**イエス様**は天におられても、おぼつかない歩みをする私たちのことをたえず父なる神様にとりなしていてくださいます。また私たちの**祈り**を聞いてくださり、**御霊**を通して親しい交わりのうちにおいて安らぎを与え、また導いてくださいます。

**3番目。大切なことは、「主への恐れと信頼の心をもって」真剣に祈ること。**

大切な問題は、私たちが弱いながらも、**絶えず主を見上げ、真剣に祈っているかどうか**です。

人は、困難や問題が大きければ大きいほどその一点しか見えなくなってしまいやすいものです。そうすると心配だけが私たちの心を支配し、**イエス様**が見えなくなってしまいます。歩むべき道から外れてしまうのです。

かつてベック兄は、私たちのために「**絶えず祈れ**」シリーズとして貴重なメッセージを残していただきました。

特に兄弟は、このメッセージが語られた一番の理由について、次のように語っておられます。

「なぜ非常に多くのキリスト者たちが打ちのめされているのでしょうか？なぜなら、そのひとびとはほとんど「祈らないか」、ほんのわずかしか「祈らない」からです。  
・・・なぜ多くの努力にもかかわらず、私たちを通してほんのわずかな人々しか、暗闇から主イエスにある光のなかに導かれないのでしょうか？ なぜなら、私たちはほとんど「祈らない」か、あるいは祈ったとしてもその祈りがすくなくすぎるからです」（「絶えず祈れ」（上巻 20 p）

そして「主の御手<sup>みて</sup>が短すぎるので救われないのではありません。主が期待されるように私たちが「祈らない」ので、主はお働きになることができないのです。つまり、**すべての失敗の原因は、私たちの『不十分な祈りの生活』にあるのです。**」（21 p）

「私たちは、主のため、またひとのために、私たちにで

きるもっとも大きなことは**祈り**であることを、ぜったいに忘れてはなりません。**祈り**によって、主のためのいわゆるご奉仕によるよりも、はるかに大きなことがなされるのです。」（23 p）

「**祈り**とは、私たちが欲しいものを主に強制しようとすることではありません。**祈り**とは、私たちが主のみ心を知り、私たち自身を主にあけわたし、主のみ心が成就することです。」（62 p）

「**イエスの名によって祈る**とは、「主イエス様との交わりのうちにとどまる」ことです。それは、イエス様にすべてより頼むことであり、自己中心の思いや欲望、つまり自己決定などとは正反対のものです。それはまた、主のうちに生き、主のうちにとどまることをも意味します」（73 p）

「祈りが、自分の健康とか、または成功とか快樂とか、さらには奉仕だけを目的としているようではいけません。ただ**イエス様の栄光**が現されることだけが、私たち

の祈りのほんとうの目的であるべきです。」（75 p）  
「私たちはただたんに『祈らなければならない』だけでなく、『祈ることができる』のです。なぜならば『祈りの助け手』として、聖霊が与えられているからです。」  
（85 p）

「私たちもまた、あきらめないで真剣に祈りつづけるべきです。しかし祈りの答えとして、いつでも私たちの願いどおりになるとはかぎりません。主は、私たちの願いをそのときすぐにはかなえてくださらないかもしれません。私たちには、まだ賜物をうけとる備えができてないかもしれません。また、主は、私たちが願うよりもっと良いものを与えるために、私たちの願いを聞きとどけてくださらないこともあるのです。」（116 p）

さらに「**悪霊に対する格闘**は、まず第一に、**祈りの格闘**なのです。私たちが、失われたたましいに対して無関心でいるとき、それは悪魔のわなにおちいりやすい、いちばん危険な状態です。私たちにとって、自分の家族の

中にまだ救われていない人がいるということが最大の悩みとなっていないなら、その人はたとえ救われているとしても、主とのほんとうのつながりを持っていないのです。なぜなら、主は一つのたましいすら失われることがないようにと望んでおられるからです。」（119 p）

「**祈りとは戦いです**。第一に、目に見えない世界や悪霊に対する戦いです。第二に、目に見える世界、つまり自分が楽らくをしたいという気持ちにたいして戦いを宣言し、自分かってでわがままな気持ちを捨てようとしてはじめて、キリスト者は**靈的に成長することができるのです**。」（122 p）

「主は『人間が主に呼び求めれば、**主は必ず答えてくださる**』と、はっきりと約束しておられます。」（179 p）

**エレミヤ 33:3 179P**

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

#### 4 番目. 主は、いつ、どのように答えてくださるのか。

上記ベック兄のことばによって、祈りについて私たちが抱える問題の根本が示されているように思い、感謝です。

ただ私などは、それに加えて「主はほんとうに答えてくださるのだろうか。いつ答えてくださるのだろうか」などと疑ってしまうこともあり、それ故にそこそこの祈りで済ませてしまうことが多いのではないかと感じています。

この点について、ベック兄は、主が個々の祈りに対応した「特定のお答え」をどのように与えてくださるかについて、次のように整理してくださっています。（「絶えず祈れ」下巻183p）

#### **○主は、いつ、どのように答えてくださるのか**

1. 主はすぐに、直接答えてくださる。（す

ぐに問題解決。私たちは改めて感謝のお祈りを捧げるこ

とになるでしょう。)

2. 主は私たちが期待したのとはちがったかたちで答えてくださる。

この点について、兄弟は、パウロが長い間の肉のとげをとり去って欲しいと祈ったときに「わたしの恵みはあなたに十分である」との、主からお答えをいただいた有名な例を挙げておられます。(IIコリント12:8-10)

3. 主はすぐにはお答えにならず、あとになってはじめて答えが与えられる。

これについて、ベック兄はご自身の次のような体験を語ってくださっています。「私は主イエス様を知るとすぐに、宣教師になりたいと願いました。しかし実際に宣教師になるまでには8年かかりました。その8年の間も、主は私の祈りを聞いてくださっていました。……しかしすぐには答えてくださらなかったのです。やがて主がそなえられたときがくると、主は道を平らにしてくだ

さり、私は私の願いに対する最上の答えを体験することができました。」(下巻184 p)

4. 主は、私たちの願いが私たちのためによくないから、あるいはもっとよいものをくださるため、私たちの願いを拒絶することによって答えてくださいます。

この例として、兄弟は、これまた有名なエリヤの経験(1列王19:15-18)を挙げておられます。

すなわち皆さんもよくご存じでしょうが、王妃「イゼベル」に命を付け狙われた末、疲れ果ててついには死を願うエリヤの祈りを、主は受け入れられません。代わりに御使みつかいいを通して、一日一日食事を与え、神の山ホレブに導き、そこで神は**新しい使命**をお与えになるというお話です。そして最後、エリヤは死を見ないで天に引き上げられたことは、ご存じの通りです。

つまり「主は、もっとよいものをくださるため、私たちの願いを拒絶され、改めて新しい導きを与えてくださる」ということです。

## エピソード 「夕暮れの散歩道」

ここへきて、私の家の近くで目にしたある光景を思い出したので、ちょっとだけ寄り道させてください。

・・・先日、夕方に、家近くの道を散歩していたときの事です。

少し前を小さな男の子がチョコチョコと歩いていました。歩き始めてまだ数ヶ月といったところでしょうか。先を歩いて行く母親の後を、追いかけるようにして歩いて行くところです。

そのうち道の先に 2 段ほどの小さな石段が現れました。それを降りるとバス通りに出て行く石段です。母親は、さっさと一人で石段を降りてしまい、数歩先で立ち止まって、いまは坊やが追いつくのを知らん顔して待っている様子でした。冷たい母親だなという思いも一瞬私の頭をよぎりました。

一方坊やのほうは、石段の手前で立ち止まり、手を伸ばして、ママの助けを求めているような仕草をしています。しばらくその状態が続いていましたが、しかし母親は相変わらずそっぽを向いたままです。さあ坊やはどう

するのか。私も、半ば心配と興味が入り交じった思いで見っていました。

するとやおら坊やは石段の上で尻をつき、両足を伸ばして、ひとつ下の段へ足をつき、うんと力を入れて立ち上がりました。残った石段も同様に、座ったり立ったり。とうとう二段の石段を一人で降りることに成功しました。母親はそれを待っていたかのように、彼のほうに向き直り、今度は手をつないでバス通りを二人で仲良く歩いて行きました。

なるほどこれが母の愛かと気づかされました。

同時に思いました。私たちの主はさらに大いなる御愛を持って、迷える小羊のような私たちをも待っていてくださいます。すぐ悩み、落ち込んでしまう者でも、高ぶりを捨てて子どものような心で祈り続けるなら必ず主は応えてくださる。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。・・・たとい、死の影の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともにおられますから」（詩篇 23：1-4）。

そんなことを考えたら、何とも言えない平安をいただ

いた夕暮れのひとときでした。

## 5. 祈る教会の力

もう残り時間がわずかになりましたが、「絶えず祈れ」(下巻)の最終章「『祈る教会』の力」だけは、この際少しでも学んでおきたいと思います。

なぜなら、ベック兄が召されたあとに、それまで攻撃の機会を伺っていたサタンは集会の一致を崩そうと、一気に各方向から攻撃を仕掛けてきました。その結果、主を悲しませる事件が各地の集会で起きてしまいました。

いま少しは落ち着きを取り戻したやに見えますが、真に集会が立ち直り、今後、このようなことが二度と起こらぬよう、また私たちの信仰がさらに深められるよう、祈りのときをもっともっと持つべきではないかと思うからです。

ベック兄は、「絶えず祈れ」(下巻)の「祈る教会の力」の中で書いておられます。

○「初代教会は「**祈る教会**」でした。あなたはイエス様を信じる人々の群れの中で、主の御力、主の御栄光が明らかに現されたことを体験したことがあるでしょうか。・・・（それは）その信者の群れの中に、真剣に祈ったひとびとがいたからです。神の力は、ただ「**祈る教会**」のなかだけにあきらかにしめされるのです。」（「絶えず祈れ」（下巻）237 p）

○日曜日の礼拝に出れば自分の義務をはたしたと思っている信者がいます。これらの人々は、**祈り会**がそれほど大切であるとは思っていません。しかしそれは大変な考え違いです。もちろん多くのご婦人方にとっては、夜に開かれる**祈り会**に出ることは不可能です。とくに夫がまだ主を信じていない場合は非常に難しいことです。ですから婦人方が時に応じていろいろなところで祈りのために集まり、お互いに膝をかがめて祈ることはたいへんいいことです（237 p）

○現代の教会や集会は、多くの問題に直面しています。

どうすれば神から遠く離れている人々がイエス様に出会い、救われることができるのでしょうか。どうすれば信者が成長し、どうすれば教会や集会の責任を負うことができるようになるのでしょうか。どうすれば必要な資金が調達できるのでしょうか。どうすれば分裂している信者たちが一致するようになるのでしょうか。問題につぐ問題です。しかもこれらは、多くの問題のうちの、ほんのひとにぎりにすぎないのです。

これらの多くの問題の根本にある原因はひとつ、「『祈り』があまりにもすくない」ことにあります。主にあるひとびとがところをひとつにして集まり、主の御名を呼び求め、祈り、大きなことを主に期待するなら、これらの問題はひとりで解決されます。

○「**祈る教会**」は、やがて「**生かされた教会**」になります。「祈り」は「存在しているいのちの現れ」です。・  
・・・・祈りは、主へのご奉仕の真の源泉となります。(238p)

このあとベック兄は、祈る教会の特徴として七点を挙げておられますが、今日は時間が足りません。ですからこの最終章「『祈る教会』の力」だけは是非おうちでもう一度目を通してくださるよう、お願いします。

最後にみことばをひとつ読んで終わらせていただきます。

ヘブル 10：35－39 401p

10:35 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。

10:36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

10:37 「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。

10:38 わたしの義人<sup>ぎじん</sup>は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」

10:39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

了

22. 9. 16 吉祥寺

22. 11. 6 町田

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるものです。

# 霊と魂、日々の歩み

ヘブル 12:2 新 404 p

12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

出だしそうそうですが、皆さんが普段扱いにくくて困っているものとは、何ですか？

いろいろあるでしょうが、私の場合は、「自分の心」と言っているのではないかと思います。

そうではなくて正直なところ、自分の「連れ合い」という方も多いとは思いますが・・・。

でも自分の心は、連れ合いのようなものでありながら、なかなか思うとおりに行かない。いや実際、連れ合いですよね。生まれつきの・・・自分が造ったものではない。**神様**が造ってくださった。本来、**霊**と**たましい**から成っているはずのものです。

ところが創世記にあるように、アダムとエバが戒めを破って、樂園から追われたとき以来、人の心は**神様**との交わりを司る**霊**が、死んだも同然となり、**たましい**の**肉の働き**（つまり自分の知恵、感情、意志など）だけを頼りに、サタンが支配するこの世を、死に向かって孤独に生きるものとされました。しかも罪という重荷を負って、「自分、自分」と心のうちで叫びながら・・・。

## イエス様の救いの御業

しかし**神様**は、人間を見限るようなことはなさいません。御子**イエス様**が、十字架上で全人類の罪を負い、身代わりの死を成し遂げて、救いの道を開いてくださったのです。それにより、**イエス様**を**救い主**と信じた人は、**義**とされ、**罪赦**されたものとなり、**永遠**のいのちまで与えられました。その上、よみがえられ、天に引き上げられた**イエス様**は、信じる者一人一人の心に、**御霊=聖霊**を送って下さいました。

**御霊**は、**イエス様**のいのちを現す霊ですから、信じる者は霊的によみがえらせられ、**新しい霊**のいのちをいただいた者として、**主のみこころの道**を歩むのです。

## 救われたあとの歩み——散歩道でない

しかし救われ、**御霊**をいただいた者であっても、**主のみこころ**に適った道歩むことは、たやすいことではありません。ベック兄は、「**信仰は散歩道ではない、戦いだよ**」と、私たちに繰り返し語られましたが、まさに救われたあとの歩みこそが大切です。

もう一度、冒頭に引用した、みことばを見てみましょう。今度はヘブル 12:1 からですが。

ヘブル 12 : 1      新 404 p

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。

12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを、考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

このみことばは、救われた私たちが日々の歩みの指針

として、大切にしているみことばの、ひとつではないでしょうか・・・「イエスから目を離さないでいなさい。」

(12 : 2)

同時にここには、「**いっさいの重荷とまつわりつく罪を捨て**」(12:1)とあります。また「**あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません**」

(12:4)ともあります。救われた者の戦いは、救われてもまだ罪の性格を強く残している、自分自身の肉の働きに対して、またそこにつけ込むサタンの攻撃に対しての戦いであることが分かります。

同時に、信じる者を待ち受ける、さまざまな試練との戦いも加わります。

しかしみことばに従うなら、私たちは信仰の道を、勝利に向かって走り続けることができます。「**イエスから目を離さないでいなさい。**」(12 : 12)

### 救われた者の困難、弱さ

それでは、このみことばに従うにはどうすればいいのでしょうか。ここで目とは言うまでもなく、**心の目を意味**

します。ということは、私たちがいただいている御霊の導きに従いなさい、御霊の支配に自分をゆだねなさい、ということだと思えます。

しかし御霊をいただいていると言いながら、私たちにっては、自分のうちの御霊の導きと、肉の働きを見分けることは簡単なことではありません。

結局、相変わらず肉の働きのままに、日常生活を過ごしていることが多いのではないのでしょうか。

心のうちの御霊の導きと肉の働き、言い換えれば霊とたましいとを見分けること。しかし、急にそう言われても困るとというのが、正直なところでしょう。それでメッセージの冒頭で、自分で扱いにくいものとして、「自分の心」という答えを挙げたのですが、……。どうでしょう。

これに対する特効薬はないかも知れません。絶えず自分の心を見張りながら、失敗と悔い改めを繰り返して、砕かれ、成長していく。それが主のみこころではないのでしょうか。

そこで今日は、まず御霊の導きと肉の働きを見分け、御霊の導きに従うためにはどうすればいいのか、信仰の

浅い者でありながら、みことばを頼りに大切と思われる点を、5つほど挙げてみたいと思います。

### 霊（御霊の導き）とたましい（肉の働き）とを見分ける

#### ①御霊が与えられていることを、確信しているか。

これは自分が救われただけでなく、それを機会にイエス様が、私たちのうちに、御霊となって住んでいてくださる、ということ、事実として確信しているかどうか、ということです。

イエス様が約束してくださいました。

**ヨハネ 12：1 新 174 p**

**12:1 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川（御霊）が流れ出るようになる。**

たとえ目に見えなくとも、感覚で捉えられなくとも、信じているか。信仰の問題です。つまりイエス様が、自分のうちに生きていてくださることを信じ、感謝し、より頼み、従っているかどうかということです。

## ②自分の十字架を負っているか。

信じる者が新しく生かされ、御霊も与えられたのは、まず古い自分がイエス様とともに、十字架につけられて死んだ上で、イエス様とともによみがえりの恵みにあずかったからです。そしてこの十字架は、救われたあとも、私たちのうちに根を張る、肉の心を砕く働きをさせていただきます。肉の働きを小さくさせていただきます。それによって御霊はより自由に私たちを支配できるのです。

ロマ 6:6      新 2 7 3 p

6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

## ③へりくだった心で祈り、悔い改めながら、みことばの力に頼っているか。

私たちのうちには、何もよいものはありません。これは事実です。でも先ほど触れたように、救われた者には、

絶えずイエス様がともにいてくださいます。祈りを通して、主との親しい交わりが与えられ、またみことばを通して、心の状態を見分けさせてくださるのです。

**ヘブル 4:12 新 393 p**

4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

また悔い改めの心も与え、真理の道を導いてくださるのです。

④集会に集い、それぞれみからだなる教会の部分部分として建て上げられ、肉の働きを抑え、ともに御霊の一致を保ち、主を証しているか。

**I ペテロ 2:4 新 400 p**

2:4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。

2:5 あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げら

れなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

ガラテヤ 5:19 新339p

5:19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。  
不品行、汚れ、好色、

5:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、

5:21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。  
前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたに  
あらかじめ言うておきます。こんなことをしている者  
たちが神の国を相続することはありません。

⑤良心、理性に照らしても正しい行動をとっているか。

なぜなら救われた者の良心は、なにより聖霊により、きよめられているはずだからです。(救われる前の良心は、なかば眠っているようなものだったでしょうが)

ヘブル9:14 新398p

9:14 まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの

御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて、死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするでしょう。

しかし良心を欠いた言動を頻繁にとるようになると、私たちは、自分のうちの霊の状態を疑ってみる必要があります。（これはだれにでも言えることです）。

**I テモテ 新374 p**

4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

4:2 それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、 . . . . .

W. ニー兄弟は、良心に対するサタンの攻撃に対して、次のように書いています。（「霊の人2巻4」祈りと戦い91－92 p）－

「ある信者は、確かに**聖霊**のバプテスマの経験を持っていますが、その後 . . . 欺かれてしまいます。 . . . 彼

らの霊が受動的（消極的）になると・・・サタンは彼らに、特別に幸いな感覚を与え始め、さまざまなビジョン、夢、その他の超自然的な経験を持つように働きます。これに彼らの霊的識別力がないという、誤りも加わって、彼らは敵の欺きによって**わな**にかかってしまいます。・・・いったん信者の霊が受動的になるなら、彼の良心も自然に受動的になります。・・・彼は自分の良心を用いず・・・その結果は、サタンの働きに対する服従にほかなりません」「ただ機械となって行動し、外からやって来る超自然的な声(悪い霊)に従います。彼らはそれを**神**の御声と取り違えているのです。・・・自分の理性や良心、他の人々の助言を顧みません。この世でもっとも頑固な人となり、だれも彼を納得させることはできません。なぜなら、彼らは自分は、他のどの信者よりも、高い道を歩んでいると考えているからです。」

つまり良心や理性の働きを無視すると、サタンに利用されてしまうということです。

バック兄も**御霊**の働きを語るときは、良心・理性も関係

あることをいつも指摘されてきました。（たとえば2013.5.28『御霊の導き』）

また、やみくもに自分の霊の力を強くしてくださいと求めること、また自分で何かを経験したい、自分が中心になりたいと考えることは、危険だとも仰っています。

このベック兄のメッセージを聴いても、ただへりくだって、自分を明け渡し、主だけが御栄光を受けられるようにという態度こそ、**聖霊**に導かれて主に用いられるために、どうしても必要なことだと思わされます。

これこそ主から目を離さないことに他ならないのではないのでしょうか。

（これを裏付けるかのようにベック兄は、「自分自身を見るならば、少なくとも千回、偉大な**イエス様**を見なければなりません。」（2013.9.3「主のみもとに立ち返ろう」）と、いつものように短く、わかりやすい言葉も残してくださいました。）

私たちの集会在、どんなことがあっても**主イエス様**から目を離さずに歩みたいと願う信者が喜んで集う、みからだなる教会として、多くの困難を乗り越えて成長でき

るよう、さらに祈りましょう。

最後にパウロが、コリントの信者に送った言葉を読んで、終わります。

I コリント 6:19 新297 p

6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

了

2019. 9. 22 吉祥寺

2019. 12. 29 町田

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるものです。

主は

へりくだった人と

ともに住む

イザヤ 57:15 -19 旧1119p

57:15 いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである。

57:16 わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるから。

57:17 彼のむさぼりの罪のために、わたしは、怒って彼を打ち、顔を隠して怒った。しかし、彼はなおそむいて、自分の思う道を行った。

57:18 わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、慰めを報いよう。

57:19 わたしはくちびるの実を創造した者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼をいやそう。」と主は仰せられる。

## 1. 神なる主と人間の関係

### ○あわれみの主

引用箇所最初に、57:15 いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためであるとありますが、このみことばを読むと思わず身が引き締まる思いがするのではないでしょうか。主の前に静まろうとするとき、真っ先に心に浮かんでくるみことばの一つです。そして祈っていると、まもなくほっとして、心に安らぎが与えられる。

**主なる神様**は聖なる高みに住んですべてを支配されているお方です。そのようなお方が、**神様**に背いて罪を犯し、また繰り返し罪を犯すような人間ともにとともに住むとおっしゃっています。

ただし高ぶって自分を誇るような人間とではなく、**心碎かれて、へりくだった人とともに住む**、つまり自分の愚かさ、惨めさを知り、ただ碎かれた心で主の前に立ち、主に赦しを乞い、より頼もうとする人とともに住むという

点が大切です。

言い換えれば、自分の高ぶりを捨て、ただ**主**を仰ぎ見て、**主**を信頼し、愛して従う者を、**主**は大いに喜び、ともに住み、生かし、愛と恵みを降り注いでくださるということです。

この愛で結ばれた関係こそ創造の昔から、**神様**が予定しておられた**神様**と人間の基本的な関係だといえるでしょう。

### ○いつまでも怒っていない

しかし私たち人間は、このような**神様**の期待とみこころを無視して、高ぶりと頑なな心に支配されて、罪の世界に迷い出てしまいました。そのため**主**は律法や預言者を通じて導きを与え、またいろいろな困難、苦しみを通じて、みもとへ導こうとされましたが、人間は**なおそむいて、自分の思う道を行く者**でした。

それでも**主**は、怒りを抑えて忍耐してくださいました。その忍耐と人間に対するあわれみがどれほどのものであったか。

引用箇所の後半のみことばがそれを示しています。

イザヤ 57:16 – 18 旧 1120p

57:16 わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。  
わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てる  
から。

57:17 彼のむさぼりの罪のために、わたしは、怒って彼を打  
ち、顔を隠して怒った。しかし、彼はなおそむいて、自分の思  
う道を行った。

57:18 わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。わたしは彼  
を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、慰めを報いよう。

わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。 ここには、ついにひとり子イエス様を犠牲にしてまで人間を罪から救い出そうという主なる神様のみこころが、見事に言い表されています。

そしてこのみことばの通り、罪に対するさばきをイエス様のうえに下して、罪と死の暗闇で苦しみをだえていた私たちを癒し、慰め、生かす道を開いてくださいました。それは私たちの周りで、私たちの罪のために苦しみ、

悲しむ者たちのためでもありました。

この世は、へりくだることよりむしろ高ぶりと誇りに満ちた人間を勝者としてもて囃します。しかし主はこのような者を退けられます。祝福しようとはされません。人の目にどう見えるかにかかわらず、**神様**に背を向け自分、自分とって生きる者は**神様**の怒りのもとにあるのです。

そしてあくまでそのような生き方にこだわる者の行く手には、死と**神**の裁きが待っています。

箴言 14 :12 - 旧986p

14:12 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

主なる**神様**は、聖であり、怒る**神**であり、罪を罰せざるを得ないお方ですが、同時にへりくだる者をあわれみ、赦し、慰め、生かしてくださるお方です。そして**イエス様**は救い主としてこのお方のみこころとご目的のためにご自身を犠牲にしてくださったのです。これが**イエス・キリスト**の十字架の贖いです。

○イエス様のへりくだり

イエス様は、地上で宣教を始めた最初から、人は神様の前に心砕かれ、へりくだった者とならなければ神様のもとに戻れないことを繰り返し教えてくださいました。

マタイ 5:3 - 新5p

5:3「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

マルコ 10:15 - 新79p

10:15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はい入ることはできません。」

有名なたとえ話もしていただきました。

ルカ 18:9 - 14 新139p

18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

18:10「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。」

18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。

18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。 という取税人の祈りにこそ、へりくだる心がよく現されています。

日本語で心砕かれ、「へりくだる」というと、なにか外面だけの態度。偽善的な態度というニュアンスがある

ように思えてしまうのですが、聖書がいうへりくだりとは、自分が惨めで、憐れで、無価値な者であることを認め、**神様**こそがすべてであると考え、心の態度を意味しています。結局自分を「無」にすることです。だから取税人の祈りこそ、そのお手本なのです。

このようにへりくだることの大切さを悟らせてくださった**イエス様**は、やがてご自身が人間のうちでももっともへりくだった者となり、すべての人間の罪をその身に負って**神様**の罰を受けてくださいました。

そのときのご様子についてマルコの福音書に次のように記されています。

**マルコ 15:14 -39 新92p**

15:14 **だが、ピラトは彼らに、「あの人がどんな悪いことをしたというのか。」**と言った。しかし、彼らはますます激しく**「十字架につけろ。」**と叫んだ。

15:15 **それで、ピラトは群衆のきげんをとろう**と思い、**バラバ**を釈放した。そして、**イエスをむち打って後、十字架につける**ようにと引き渡した。

.....

15:25 彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

……

15:33 さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。

15:34 そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。

……

イエス様が苦しい息の中から「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫ばれました。これによっても私たちが受けるべき神の怒りを、イエス様が代わりに受けてくださったことがわかります。

また今読んだ節の間に兵士や群衆が代わる代わるイエス様をいたぶり、傷つけ、辱めては楽しむ姿が記されていますが、これこそ愚かにも神様に逆らい、救い主を侮辱して喜んでいる罪人の姿、生まれながらの私たちの姿です。

しかしイエス様はそのような民衆の姿を前にしても、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ23:34)との祈りをもって苦しみに耐え、身代わりになってくださったのです。

このイエス様の犠牲の死とそのよみがえりについて、パウロは次のように書きました。

ピリピ 2:6 - 11 新352p

2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、

2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。

2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

2:9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、

2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白し

て、父なる神がほめたたえられるためです。

まさにご自分を無にして、いや、さらに自分を卑しくし、「0」以下にして苦しみに耐えてくださいました。

それによって先ほどのイザヤ書57章の記された主のみこころ、すなわち

**57:18 わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、慰めを報いよう。**

**57:19 わたしはくちびるの実を創造した者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼をいやそう。」と主は仰せられる**

というみことばが成就したのです。

私たちは、イエス様をご自分を無にして示してくださった真実の愛に目を向け、私たち自身がへりくだった者となってイエス様を救い主として受け入れ、信頼して歩むのかどうか問われています。これこそ神様と人間のあるべき関係に立ち戻ることであり、これから先、神様のもとで幸福な道を歩むかどうかの分かれ目です。

## ○救いと幸福の道

そのために、具体的にはどうすればよいのでしょうか。

答えは簡単です。ただそのまま正直な姿でイエス様のところへ行けばいいのです。

イエス様は、私たちが相変わらず自分の思う道しか行けない者であることをよくご存じです。だから立派になろう、勉強しようなどとは思わないで、罪と悩みを負ったままイエス様のところへ来て、重荷を取り去ってくださるように祈って、救いを求めればいいのです。

イエス様はおっしゃっています。

**マタイ 11:28 -29 新19p**

11:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

イエス様は私たちの重荷をご自分が負って、代わりに

私たちに平安を与えてくださいます。必ずそのようにしてくださいます。なぜなら正直な姿でイエス様のもとに来て救いを求めることこそ、神様が望んでおられる、心砕かれ、へりくだった者の心の態度だからです。

イエス様は、疲れた者にさらに勉強せよ、努力せよなどとはおっしゃいません。また教会へ行って教会員になりなさいともおっしゃいません。ただそのまま私のところへ来なさい、そうすれば私が休ませてあげるとおっしゃっているのです。確かに

マタイ 11:29 - 新19p

11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

とおっしゃっていますが、それは勉強しなさいということではなく、わたしがあなたと一緒に生き、わたしのへりくだりをあなたのうちからいのちの働きとして与えるから、これによって罪赦された喜び、平安、祝福にあずかるようにとおっしゃっているのです。

救いのために勉強しなさい、努力しなさいというのは、

宗教家の言うことであり、また教会員になりなさいと言  
うのは宗教団体が求めることです。それは神様の前にへ  
りくださる者となる道ではありません。

またイエス様は神様であって、宗教家ではありません。  
私たちへの約束のすべてを一人一人の上に実現してくだ  
さる救い主であり、生けるまことの神様と一体のお方で  
す。私たちが素直な心でイエス様を見上げ、信頼してよ  
り頼むことだけを求めておられます。

## 2. 空の器と御霊の働き

### ○救われた者の高ぶりと主の訓練

冒頭の「イザヤ 57:15 わたしは、高く聖なる所に住み、  
**心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の  
霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである**」以下の  
このみことばは、すでに救われた後も私たちが絶えず嘯  
みしめなければならない大切なみことばです。

なぜなら私たちは、主のただあわれみによって救われ  
たのに、すぐにそれを忘れ、主から離れて、なおそむい  
て、自分の思う道を行ったとお叱りを受けても仕方のない

者だからです。相変わらず自分中心、高ぶりとむさぼりの罪に取り憑かれ易い者だからです。

しかし主は へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かす と約束してくださいました。イエス様を救い主として信じ、受け入れたものには聖霊、御霊が注がれています。

問題は高ぶる自分に気をつけて、主が与えてくださった聖霊、御霊の御支配のうちに意識して身を置くかどうかにかかっています。

それは日々の訓練です。つまりいつも主に信頼し、主につながって、実を結ぼうとしているかどうかです。

具体的にはみことばと祈りの生活を大切になして繰り返し主を仰ぎ見ることです。

最初に述べたことですが、イザヤ 57 章のみことばをもって主を仰ぎ見て祈るとき、平安をいただけるのは御霊の働きです。

また主にある兄弟姉妹の交わりのうちにとどまっていることも大切です。礼拝を通して私たちはどれほど平安と喜びをいただいていることか。兄弟達の祈りによって、

自分が惨めな者であり、主がすべてであるという思いが起こるからです。

また兄弟姉妹との交わり、ともなる生活の中にあって私たちは自分がどのように高ぶる者であり、愛のない者であるかも示されます。パウロが書いた次の勧めが、耳に痛いのです。

**ピリピ 2:1 -5 新351p**

2:1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ  
り、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみ  
があるなら、

2:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保  
ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてくださ  
い。

2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだっ  
て、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。

2:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それ  
はキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

たとえみことばや祈りを大切にしている、イエス様からの平安をたびたび体験している、兄弟姉妹に対してなかなか自分を無にしてへりくだれない。だから肉の目で人を見るのではなく、イエス様の愛とへりくだった心を持って接するよう、絶えず自分を吟味し、悔い改めに導かれるように心がけなければならないのです。

主もまた、私たちが御霊のご支配のうちによりしっかりととどまるよう、特別に訓練されます。時には主の怒りに触れたのではないかと思うような懲らしめ、悩みを与えられる。

しかしそれはあくまで私たちが砕かれて、どこまでも主に信頼し、主に自らを明け渡して御霊の導きに従って主の器として多くの実を結ぶためです。

決して私たちがだめにするためではありません。冒頭の引用箇所にも、わたしは、怒って彼を打ち、顔を隠して怒った。とありますが、しかし、わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるからとおっしゃっています。

先ほど開いたヨハネ書にも

ヨハネ 15:2 新193p

15:2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

とあります。

実を結ばない者は取り除かれますが、もっと多く実を結ばせたいと思う者に対しては、主は刈り込みをなさるのです。私たちに纏わり付いて、邪魔をするものを取り除かれます。

それは自分の利益、立場、プライド、愛着あるいはこの世への配慮、さまざまな思い煩いといったものかもしれません。その多くはやはり高ぶりの一種でしょう。

私たちが刈り込みによる痛みをこらえ、一切合切を主に明け渡し、完全に主にゆだねようと主の前に静まるなら、主が大いに働いて私たちのうちを清め、私たちのうちにいのちとなって満ちてください。

## 福音列車

子供たちの賛美に「福音列車」という歌があります。

「福音列車に乗っている。天国行きに。ポッポ。

罪の駅から出てもう戻らない。切符はいらない、主の救いがある。それでただで行く。ポッポ。

福音列車に乗ってる、天国行きに」  
とあります。

それに比べ、私たちは大きな荷物、「古い自分」あるいは「**自分の思い**」という大きな荷物を首にくくりつけて天国行きの列車に乗り込もうとするので、やっとデッキにしがみついているだけ。それでは振り落とされないようにするのが精一杯。とても平安というわけにはいかないのでは……？！

子供たちの素直さにはかないません。

宗教家は、しばしば信者になると、すべてがうまくいく。どんな病気も治る、仕事がうまくいく、悩み事がなくなるなどと宣伝します。聖書はそんなことは言っていません。

悩みを通して人は一層祈る人になり、主に頼る者となり、より砕かれてへりくだった者となる。悩みを通して、

イエス様が一人一人のうちによりはつきりと住んでくださるから、その人には主の平安と喜びが増し加わり、悩みながら喜ぶものとなり、主の器として用いられて一層大きな実を結ぶのだ。

これが聖書が示すところであり、私たちにより大きな祝福を与えるために神様が取られる方法です。

ですから試練や悩みがあっても、主を仰ぎ見て、十字架で犠牲になって私たちを救い出してくださった方の愛と約束に信頼して、安心してイエス様に従っていけばよいのです。またそのような者となれるよう、お互いに祈り合って御国を目指して歩み続けたいものだと思います。

**詩 34:18 - 旧859p**

**34:18 主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。**

**詩 51:17 - 旧877p**

**51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。**

(了)

\*10.2 沖縄 10.5.25 春日部K姉宅 10.5.29 山口

10.6.25 掛川 10.7.10 北見・旭川 10.7.11 札幌

10.7.18 吉祥寺 11.6.19 町田

\*再作成 2024. 12. 10

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるものです。

わたしは  
まことの  
ぶどうの木です

ヨハ 15 :1、2－5, 6 193p

15:1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。

15:2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。……

15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

この引用箇所のみことばは、イエス様が弟子たちに与えられたものです。まずヨハネ15章1節、わたしはまことのぶどうの木とあります。

主なる神様は、イスラエルを「純良種」のぶどうになるようにと選び、育てておられました。と

ころがその期待に背いて酸っぱいぶどうになってしまったというのが、繰り返し聖書が語るどころです。

しかし**神様**は、選びの民を見捨てるようなことはなさいません。御子**イエス様**を地上に送り、イエス様というまことのぶどうに木にとどまり、つながることによって失われた民が回復され、良い実を結ぶようにと特別のご愛を示されたのです。

それも選びの民だけでなく、すべての人間が救われるようにということでありました。

すなわちどんな人でも、悔い改めて**イエス様**を信じ受け入れるならば、罪赦され、永遠のいのちが与えられる。しかも**イエス様**に接ぎ合わされることにより、いのちの水を絶えず流し込んでいただける、つまり**御霊の働き**が、いつも与えられているということです。

他方、次のヨハネ15章2節では、わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除きとありますが、これは救われたものに対する警告です。

つまりいのちの木にとどまる＝つながることが許された者でも、かたちだけ**イエス様**を受け入れたという状態のままでは、新しく生まれ変わることができない。また一度新しいいのちを体験した

ものでも、しっかりとどまる＝つながっていないければ成長できず、枝としても保たれ得ない。実を結べない。とおっしゃっているのです。

もちろん、たとえ幼く弱々しい枝でも誠実に主にとどまる＝つながろうとする者は、その信仰が成長するように愛をもって主が働いてくださいます。

それで今日は、救われたあと、私たちが主にとどまる＝つながって実を結ぶ枝となるためには、どのような信仰生活が求められているのかを考えてみたいと思います。

わかりやすくするために、便宜上、三段階に分けて考えてみます。

### 1. 主にとどまり、つながり続ける信仰生活の**第一**段階、

みことばを頼りに、絶えず主を見上げ、祈ること

先ほど読んでいただいた冒頭のみことばの後に、次のようにあります。

ヨハ 15:7    193p あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあ
---------------------------------------------

あなたがたとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

私たちの信仰も、その成長も、イエス様がおっしゃるようにみことばに支えられています。ですからイエス様にとどまる＝つながっていることの第一は、みことばを幼子のように信頼して、絶えず祈るということではないでしょうか。みことばを理解することではありません。調べ回ることもありません。心を捉えたみことばで祈りはじめればいいのです。その時私たちは、私たちの祈りを主であるイエス様が聞いていてくださると知り、たとえ苦難のうちにある時でも、孤独感から解放され、平安、希望がいただけます。これは主との親しい交わりのうちに置いていただいた恵みです。まだイエス様をご存じない方にも、是非体験していただきたい恵みです。

しかし、主は必ずしも祈りにすぐにお答えをくださるとは限りません。望んだ通りのお答えを実現してくださるとも限りません。主は、私たちにとって**最善の時に最善のお答え**をくださいます。また、新しい生活をしようとしても、自分は少しも変

わっていない、相変わらず罪を犯すものだと、ガッカリすることもあるでしょう。自分の古い肉の働きとの戦いが始まっているのです。

この間、要求される忍耐、悔い改め、信頼、信仰の従順は、信じる者が、次に信仰生活の第二、第三段階と進んでも、イエス様にとどまり、つながって実を結ぶ者とされるための大切な訓練です。

## 2. 主にとどまり、つながり続ける信仰生活の第二段階

### 御霊に導かれ、自分を明け渡して歩むこと

上のようにみことばに支えられた祈りの生活を通して、主との親しい交わりにとどまり、自分をゆだねて歩む信者のうちには、イエス様がともにいて御支配くださる。つまり御霊を通して肉の働きを抑えてくださることも約束されています。

ガラ 5:19 -24 339p

5:19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、

5:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、

5:21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。

.....

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。

5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。

一体、肉の思いに支配されず、御霊に従って歩むために私たちになにができるでしょう。何もできないのです。唯一、肉なる自分は十字架につけられ、死んでしまったと思いを定め、自分の全てを主に明け渡す。そのほかには、どんなすべもありません。

ルカ 9:23 119p

イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

結局主から目を離さず、たえずみことばに立ち戻って祈る。また古い自分は十字架で死んでしまったことを事実として受け入れて、静まり、自分

の思いを無にするとき、それまで邪魔をしていた自我が砕かれ、いのち豊かな樹液＝御霊の満たしをいただくことができます。数々の試練、困難を乗り越えて、真の平安、主の再臨への期待、天国の希望もわき上がってきます。

もちろん言うは易く、行うは難しです。しかし、もしこの戒めを無視していつまでも自分勝手をし続けるならば、樹液をいただくどころか、実を結ぶことなく、ついには投げ捨てられ、燃やされてしまいます。

引用箇所最後の最後にあった通りです。

ヨハ 15:6 193p

15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます

### 3. 主にとどまり、つながり続ける信仰生活の第三段階

主にある信仰生活を、悪霊の惑わしから守ること。そしてみからだなる教会の部分・部分となって立て上げられ、主を証しすること。

(もちろん第三段階といっても、これは第一、二段階でも求められていることです。)

イエス様は、次のようなたとえ話をしてくださいました。

マタ 12:43-45 22p

12:43 汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。

12:44 そこで、『出て来た自分の家に帰ろう。』と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。

12:45 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうすると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。

つまりイエス様が来られて、人々がきよめられるべき時代となったのに、多くの人が中途半端な悔い改めしかしないので、一度出て行った悪い霊が、仲間を大勢連れて戻ってきて、信者の心を占領してしまう。結局信者とは名ばかりで、**悪霊の巣**と化す恐れがあるという戒めです。これは当時

だけでなく、今の時代の信者にとっても言えることではないでしょうか。

主につながることをおろそかにし、悪い霊に取り込まれると、折角の信仰を失うばかりか、イエス様に敵対する群れとして厳しい裁きを受けることになります。

W ニー兄弟は、次のように書いています。

「福音は人を救って、人を罪から救い出すだけでなく、人をサタンからも救い出します。わたしたちは福音を宣べ伝える時、なぜ悪鬼のことを述べないのでしょうか？」

「最も防御しなければならないことは、悪霊たちが信者を利用して、自分たちのために働かせ、信者の中における悪霊たちの働きを守らせようとしていることに対してです！」

「(その)信者は次のように言うかもしれません。・・・キリストを通して、わたしはすでに勝利を得ています。・・・わたしはサタンについては何も知りたくありません! わたしたちはただ福音を宣べ伝えます。』」

「『悪霊の働きの原則は常に、「輝き(主の真理の光)を、彼らの上に照らさせないように』(Ⅱコリント四・四)することです。」

「信者自身は悪霊を追い出すことはできませんが、

彼は自分の意志を真理の側に置き、悪霊にその働きの地位を失わせることはできます。」「真理だけが偽りを除き去ることができます。それはちょうど、光が暗やみを追い払うことができるようにです。……彼は専心して祈り、自分に光を与えてくださるよう神に求めるべきです。」(W二一霊の人3巻3章『救い出される方法』より)

ですからイエス様の次の忠告も、主にある信仰生活を守り、主のみからなる教会に組み合わされて、主をあかししようと願う私たちには大切なみことばです。

マタ 7:15 11p

7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。

7:16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。……

7:19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

7:20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。

いま私たちは、集会のうち、外からの惑わしに苦しめられています。イエス様は私たちに、その惑わしが結ぶ実を見て、よい木か、悪い木かを見分けなさいと仰いました。仲間が大勢いて楽しいとか、自由で悩む必要がなく、気持ちがあつとすとか、尊敬できる中心人物がいるなどということではないのです。よく祈って霊の目を開いていただいて事実を見るべきであり、うらみや同情心などの感情に頼ってはいけません。

惑わしが結ぶ実とは何でしょうか。次のみことばが、それを示していると思います。

箴言 旧 677p

6:16 主の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。

6:17 高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、

6:18 邪悪な計画を細工する心、悪へ走るに速い足、

6:19 まやかしを吹聴する偽りの証人、兄弟の間に争いをひき起こす者。

ベック兄もかつて何度もシリーズで、悪霊について詳しく話してくださいました。その後も「悪魔についての話はあまりしたくないんだけどね」などと仰りながら、いろいろなメッセージの中で重要な導きの言葉を残していただきます。(たとえばメッセージ 091110「お前たちは一体なにものだ」など)

それだけでなく、ベック兄ご自身が身をもって集会を悪魔の試みから守ってくださったことは、記憶に新しいところです。いま挙げたメッセージ 091110「お前たちは一体なにものだ」の冒頭で兄弟は「もう日本に帰ってきたくはなかった。ブラジルで改めて開拓伝道でもしようかと思ってしまった」と珍しく辛い心のうちを漏らされました。それでも兄弟は、主に全てを捧げて最後まで戦ってくださいました。

しかし兄弟が召された今、私たち自身が、聖書があらかじめ警告していた通りの悪魔の試みの中に置かれています。

もっともこの試みは、主が私たち一人一人の信仰に光をあて、実を結ぶ枝か、そうでない枝かを見分けるために、主ご自身が許された試練だと考え

ベック兄は「イエス様が入れば、サタンは出る。我々が追い出さなければならぬのではない。」などわかりやすい言葉で警告してくださっていました。

だとすれば今、だれかれの区別なく、みなが正直に主の前に出て、心のうちを調べていただき、悔い改めて、みこころの道へと導いていただくようさらに祈らなければならぬと思います。

そしてこの集会在、未信者の方々に存分に福音をお伝えするのにふさわしい、喜びと平安に満ちた場となりますよう、みなが心を一つにして祈れば幸いと思います。

詩 139:23

961p

139:23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。  
私を調べ、私の思い煩いを知ってください。

139:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないか  
を見て、私をとこしえの道に導いてください。

(了)

05.9.12 大阪

19.6.21 町田

19.12.22 吉祥寺

\*引用聖句のページは新改訳聖書第2版によるものです。

終わりに

「終わりに」などちょっと大げさな題をつけてしまいましたが、どうしても最後に、ゴットホルド・ベック兄弟の指導と援助、心遣いについて一言触れさせていただきたいと思います。

本冊子をお読みいただいた方は気づかれたと思いますが、収録された私のメッセージは、2005 から 6 年に始まって 2012 年までの間に使用され、その後全く使用されず、2017 年以降にメッセージとして再使用されたものが、少なからず含まれています。

実は 2012 年頃になると、それまでの疲れがたまり、体力的にご奉仕が続かなくなり、そのため私はベック兄にお願いしてそれまで一時は 20 カ所近くあったメッセージ当番を 3 回に分けて減らしていただき、結局 2012 年までにはメッセージとして担当していた集会のご奉仕のすべてから外していただきました。

もちろんベック兄もここまでのことは予想しておられなかったことと思いますが、何も仰らず、私の希望するまを「いいよ」と仰って許してくださいました。

以後私は家の中に引きこもり、家族の車で病院通いをし、時々学び会に参加するほかは、2016年までの5年間を自宅で気ままに過ごさせていただきました。

### 御代田での証し

ところが2016年になって、あるときベック兄から突然電話が入り、今度の4月の『御代田喜びの集い』で夫婦二人で証しをするようにというお話しをいただきました。

突然のことなのでびっくりしましたが、疲れもとれて体調もだいぶ快方に向かっていたので、1週間後の『喜びの集い』のために慌てて準備し、久しぶりに御代田の大講堂に駆けつけました。そして私は用意されていたプログラムに従って壇上に上がり、恐る恐る証し兼メッセージのようなお話しを始めていました。忘れもしない2016年4月29日、この年の『春の喜びの集い』の一日です。

講堂にはかなりの御兄姉方がおられました。が、ベック兄のお姿は見当たりませんでした。が、私が話し始めて

しばらくして、ベック兄が入ってこられ、ふらふらした足取りで講壇近くの長椅子に腰を下ろし、やがてすぐに横になってしまわれました。それで私は初めて兄弟の体調が思わしくないのだと気づいたのですが、お話しを続け、話し終わると今度は姉妹の証しへとバトンタッチしました。その間兄弟は長椅子に横になったまま。あれこれの思いが私の頭の中を巡り巡っていましたが、一応私たちの証しが終わると兄弟姉妹はみな講堂を出て行きました。

しかしベック兄は相変わらず長椅子に横になったまま、立ち上がる様子は見えません。

そこで私たち夫婦は会場出口近くの長椅子に移り、一言ご挨拶をと思い、その機会を待っていました。と言うより兄弟のご様子が心配だったのです。

やがて5～6分経った頃でしょうか。兄弟が最前列の椅子から起き上がり、帽子をかぶり、大型カメラを収納した鞆を手にしたいつものお姿で、ゆっくりと私たちの方に歩いてこられました。そして一言「よかったよ」と声をかけてそのまま大講堂を出て行かれました。

それが私たち夫婦がベック兄のお姿を見、そのお声を聞いた最後の時でした。

後で聞いた話ですが、この日体調が悪化しておられるベック兄が会場に入らないよう、ご家族のどなたかが講堂の入り口で番をしておられたそうですが、兄弟はそこをすり抜けて集会に参加してしまわれたということでした。

それほど兄弟は、私のように体調不良のためとは言え、途中で主のご用を果たせなくなった者のことを、最後まで心配し、祈っていて下さったのだとわかりました。

今でも、ふらつきそうになる足を踏みしめながら私たちのほうに歩いてこられる兄弟の姿が、目に浮かびます。

そのお心遣いのおかげで私のような者も、この後吉祥寺集会、町田集会を中心に2025年6月に至るまで、メッセンジャーとしてのご奉仕を続けさせていただきました。

### みからだなる教会への道

しかしベック兄が召された直後から、その「後継者」

を目指しているのか、集会を自分たちの思いで仕切って  
いきたいという意図からか、聖書にもないあれこれの主  
張を伝え歩いたり、グループづくりを進めたりする者た  
ちが現れ、集会に混乱を持ち込み、まさにサタンを喜ば  
せる事態が引き起こされました。

しかし本冊子でも見たように（7. 「わたしはまことの  
ぶどうの木です」134-135 p）、幸いなことに、これま  
でにベック兄はこのような事態にも対応できるようにみ  
からだなる教会についての心構えを繰り返し語って  
いただきました。

そのために多くの兄弟姉妹は祈り合い、助け合い、み  
ころにかなった信仰の道を歩む努力を続けたので、思  
わぬ形で持ち込まれた艱難にも耐え、みからだなる教会  
を目指し続ける集会＝キリスト集会を守ることができ  
たのだと思います。

こうして、繰り返しになりますが、最後まで私のよう  
に体力もなく、すぐへこたれてしまうような者への心遣  
いを持ち続けていて下さったベック兄、さらにもともに歩

んでくださった多くの兄弟姉妹に感謝いたします。

そしていつもその背後の高きに立っておられ、変わらぬ御愛をもってすべてを支配しておられる**神様**と**主イエス様**に感謝し、**御名**を誉め讃えます。

イザヤ 54 : 10 旧 1116 p

たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない」とあなたをあわれむ【主】は仰せられる。

了